

(4)豊中歴史同好会の毎月の例会が行われている。蛍池駅前ルシオーレビル付近は、蛍池東遺跡とよばれるが、ここからは鳴滝遺跡や法円坂遺跡よりもさらに大きい五世紀の大型建物が発見されていて、最多十〜十二棟あった可能性があるとされている。

詳しくは次の資料を参照されたい。

*大阪府文化財調査研究センター 合田幸美『五世紀の大型建物遺構について』『つどい』第一五六号 ○一・五・一

*金光正裕『蛍池東遺跡(1・2)』『宮の前遺跡・蛍池東遺跡・蛍池遺跡・蛍池西遺跡』一九九二・一九九三年度発掘調査報告書』(財)大阪文化財センター 一九九四年

(文責) 阪口・石塚・野田



桜井茶白山古墳の現地説明会と赤坂天王山古墳

(会員) 山口 久幸

八月から橿原考古学研究所の手で発掘調査が進められていた桜井茶白山古墳の現地説明会が十月末に行われるという情報もたらされ、これにともない十月の現地見学の予定を変更した。三十一日(土)阪急梅田駅に集合し、途中近鉄鶴橋駅からの参加者を加え桜井に向かった。桜井駅には亀山からの村主さんもおられ総勢三十四名となった。

改札口を出ると現地への誘導員がいるので、混雑状況を聞いてみると「二十九日は二千人、三十日は二千六百人、今日は朝から行列が来ています」との返事があり、待たされることを覚悟して係員の誘導に従い旧道を歩く。道では既に見学を終えて帰途につく人たちとすれ違う。普段は静かな通りだが、かなりの人の往来である。古墳を廻るようにして近付くと国道に沿って広

場が造られ、古墳に向かいロープで誘導路が設けられている。墳丘には前方部の裾から登るようになっており、行列は五十メートル余りも続いているだろうか。係員からパンフレット「桜井茶白山古墳の調査」を貰い行列の後ろに並ぶ。

桜井茶白山古墳

墳丘に登ると、後円部への登り口まで更に行列が出来ている。斜面は墳形を崩さないように鉄製の梯子が架けられ、後円部にも急な梯子段を登る。調査のため樹木が伐採され、歩きやすくなっている。古墳時代前期に築造された大古墳で、石室を見学できる機会はそう多くはない。墳丘は鳥見山丘陵の先端部を切断し前方部を南に向けて造られており、墳丘自体は元の岩山で形成されている。

今回公開されたのは後円部の埋葬施設で、石室を覆っていた上部の盛り土部分は取り除かれ更に石室の天井石の一部も取り除かれて、石室の周囲を廻りながら上から内部を観察できるようになっている。配られたパンフレットの記録によると、石室の大きさは南北方向に六・七五メートル、北端の幅一・二七メートル、高さ一・六〇メートル程となっている。天井石はベンガラを練り込んだ粘土で覆われ、その上に周囲より高く土を盛り上げて南北一・七メートル、東西九・二メートルの大きさの方形の壇が築かれていた。壇の上は更に板石と円礫で化粧し、縁には二重口縁の壺が並んでいたと思われる、と記されている。石室内部の側壁は全面朱に塗られた板石が丁寧に積み上げられて築かれ、天井石も一つ一つ鮮やかに朱が塗られている。天井石の並ぶ北西端には石室を覆っていたであろうベンガラを練り込んだ粘土の一部が見られる。石室に使用された石材は大阪柏原市の芝山、大阪羽曳野市春日山、また南淡路の沼島から



桜井茶臼山古墳の公開された石室

運ばれてきたという。床面は全面朱に塗られた板石を二重三重に敷きつめ、その上に棺床土を置いて木棺が安置されていたとされている。残念ながら木棺は既に運び出されている。説明はないがこの木棺もおそらく全面朱に塗られていただろうと思われる。これだけ大きな古墳でしかも大量の朱が使われていることは、被葬者の生前の力の大きさを示しているといわれる。多くの副葬品及びその破片が出たようであるが、それについての展示又は説明がなかったのは残念であった。堺女子短期大学名誉学長の塚口先生は、当墳は四道將軍の一人大彦命の墓と見ておられるが、如何にも大王陵級の墳墓という感じがする。

宗像神社

桜井茶臼山古墳の見学を終え、大宇陀に向かうバスの停留所に行くと少々時間があまる。この時間を利用して茶臼山古墳の筋向かいにある宗像神社を訪ねた。数年前に訪ねたときと境内の様子が変わり社殿も新し

くなっている。境内では見学の人の流れを予想してか地域の人たちが地域情報紙である外山地区の区報を来訪者に配っていた。区報には宗像神社の由緒が記されているが、以前訪れたときの記憶と少し違っているように思われたので、帰って『日本歴史大系』奈良県を調べてみた。式内宗像神社は『類聚三代格』所収の寛平五年十月二十九日の太政官符によれば、当神社の祭神は現福岡県の宗像大社と同神で、氏人高階真人忠峯の祖高市皇子が神舎を修理したとある。高市皇子は胸形君徳善の女尼子娘むなかたのみとくぜんむすめあまこのいらぬめと天武天皇の間に生まれており、天武朝頃に胸形君の一族が本拠地筑前国の氏神を勧請したと考えられる。当社は南北朝時代に戦火により焼失し、一時高階氏の自邸に移された。春日社と名を変えたりしたが、万延元年に改めて宗像大社より神霊を迎え社殿を完成し、明治八年に春日社から宗像神社に改められたと記されている。現在は外山地区の人々が地域の氏神として管理に当たっているようである。

境内の隅に「能楽宝生流発祥の地」の碑が建っている。記録によると外山には大和猿楽の一つ外山座があった。外山座は後に宝生流となり、室町幕府・豊臣家・江戸幕府に仕え、能楽シテ方宝生流として今日に続いている。

赤坂天王山古墳

停留所に戻り程なく来たバスに乗ったが小型バスのため、三十数人が乗り込むと超満員となった。下尾口で下車、晩秋の道を倉橋池の方向に向かい歩き出す。池の堤防が左手に望める位置まで来ると、右側にこんもりとした茂みがある。道端に天王山古墳の説明板があり、畑の細い畦道を登ると、折から農家の人が畑の手入れをしていた。挨拶をして天王山古墳を廻り込んで先に陪冢の天王山3号墳を見に行く。墳丘の前で中司先生から主墳である天王山古墳と陪冢について説明していただく。天王山3号墳は二段築成の円墳で、入口は狭く一人ずつ腹ばいになりながら中に入る。しかし羨道

赤坂天王山古墳の石室



から石室に進むと、石棺が見当たらないこともあり石室は意外に広い。十数人が入っても余裕がある。側壁には大きな石が積み上げられ、天井は三枚の天井石で覆われている。天井までの高さは三メートル程もあるだろうか。

3号墳を出て天王山古墳に戻る途中、方形の2号墳を覗いてみた。天井石と思われる下に僅かに隙間があるが暗くて内部を窺うよしもない。

天王山古墳は六世紀末頃の築造で、方形

の東西四五・五メートル、南北四二・二メートルの三段築成と記されているが、中司先生が以前計測したところ東西約五三メートルを測つたとのことである。3号墳と同じで入口は土砂に埋まり狭い。しかし中は広く、使われている石の大きさも異なる。

石室内に大きな石棺が置かれている。立派な石棺に感心してみているが、崇峻天皇の遺骸がこの中に納められていたことになる。

崇峻天皇の陵については、宮内庁が指定している崇峻天皇陵は倉梯でも寺川沿いにある。陵の場所を決めた経緯として、明治二十二年崇峻天皇の陵地搜索は不能として、『書紀』の即位前紀八月の条に「倉梯に宮を造る」とあることから、柴垣宮伝承地と天皇の位牌を安置する観音堂を陵としたと記録されている。

崇峻天皇については、『日本書紀』崇峻天皇五年十一月の条に、

馬子宿禰、群臣を許めて曰く、「今日、東国の調を進る」といふ。乃ち東漢直駒をして、天皇を弑せまつらしむ、或

本に云はく、東漢直盤井が子なりといふ。是の日に、天皇を倉梯岡陵に葬りまつる。

と記されている。記述の倉梯岡の埋葬場所は当赤坂天王山古墳と考えてほぼ間違いないと見られている。

この記述の後に東漢直駒については、蘇我嬪河上娘を偷隠みて妻とす。河上

娘は蘇我馬子宿禰の女なり。馬子宿禰、忽河上娘が駒が為に偷まれしを知らずして、死去りけむと謂ふ。駒、嬪を汗せる事頭れて、大臣の為に殺されぬ。

と記されているが、権力者としての馬子の政治的意図が感じられる。

見学を終えて、墳丘の周囲で遅い昼食をとる。今回の見学は竪穴式石室と横穴式石室の違いはあれ、はからずも二つの大王陵級の石室を一日で見たことになる。貴重な経験であった。

今回の見学をお薦め下さった中司先生に御礼を申し上げます。



二〇〇九・一〇・三一 桜井茶臼山古墳にて

豊中歴史同好会 博物館に登場

大阪府立弥生文化博物館で開かれていた「大阪の宝物」と題する特別展（九月十二日～十一月十五日）を見に行つたおりに、次のようなパネルを発見しました。

【今回の展示では「今、知られている銅鐸は全国で五七〇個を超え」と記している。

これは出土地が確実なもの四二三個と、出土地の伝承されているもの一〇二個と小銅鐸五四個を足したものだ。

実際にはこれ以外に出土地不明の銅鐸が約七〇個ある。これを加えると銅鐸の総数は約六五〇個となる。

このパネルは豊中市歴史同好会の野田昌夫さんのご指摘を受けて追加しました】

「銅鐸の世界」のコーナーの説明文に誤つた記述があることに野田さんが気づいて指摘されたところ、博物館では、さっそくパネルを新たに作成して、追加展示されたとのことです。

野田さんの銅鐸に対する知識の深さに感

服しました。また豊中歴史同好会の名前まで出していただいたことに感謝します。

（編集部）

枳殻熟れ天平薨よみがへる

宮田 佐智子

一月の例会

一月九日（土） 午後二時より

会場 豊中市教育センター

「オホクニヌシと出雲大社」

同志社大学 教授

辰巳 和弘 先生



一月の現地見学

一月の現地見学は新年会をかねて、松尾大社に参拝します。

編集後記

今年は考古学の話題の多い年でした。国立歴史民俗博物館グループによる箸墓古墳の築造年代の炭素14年代法による推定。石室に大量の水銀朱が使われていた桜井茶白山古墳。新たな調査で遺構が全山にわたって分布していることが分かった、弥生時代の高地性集落として有名な芦屋の会下山遺跡。同じ中軸線上東西に大型建物を含む四棟の建物跡が発掘された纏向遺跡。いずれも今後議論が深められるであろうものばかりです。

来年も私達にとつてわくわくする年になりそうです。これからも皆様のご協力の程をよろしく願います。

<http://homepage2.nifty.com/toyonakarekishi>